

蚕カゴ

養蚕室においては、蚕と桑の葉の置き場を設けるため、竹を編んで作った広く平らなカゴが伝統的に用いられた。このカゴは、棚にあげ、紙と桑の葉を敷き詰めて使用する。敷き詰めた葉には蚕種がまかれる。卵がふ化した後、蚕はカゴの中で桑の葉を食べて、残りの生涯を過ごすことになる。

蚕カゴは今日でも一部編まれているが、この製品が最も広く使われたのは、19世紀から20世紀早期にかけての期間である。実際、1876年フィラデルフィア万国博覧会における日本展示の公式カタログにおいて蚕カゴへの言及が見られる。カタログでは、「竹をゆるく編んで作られる1種の枝編み細工で、非常に大きい、長方形の、ほぼ平らなトレーの形をしている・・・主に上野〔群馬〕と武蔵〔東京とその近郊〕の地域で使われる」と説明されている。